

愛媛大学地域創成研究センター活動報告

—— 平成21年度（2009年4月～2010年3月） ——

1 センター全体の活動状況

2009年度も前年度までの活動を引き継ぎ、「mitまちなか大学」の開催、地域シンポジウムの開催、「プロムナード・コンサート」の開催などに取り組んだほか、重点研究の推進、学内の地域貢献・地域研究組織・団体への助成および後援をおこない、これらの組織・団体と連携して、さまざまな活動に取り組み、地域貢献活動や地域研究の促進のための活動を継続した。

今年度の重点研究として、前年度に引き続き、「観光による地域振興と地域づくりの展開」、「多文化共存と地域」、「地域の芸能・絵画等における大学PRODUCEの可能性」、「地域文化のアクチュアリティ～音と映像」の4つの大きなテーマを掲げ、継続的に調査活動や研究活動をおこなってきた。これらの成果の一端は本研究年報に掲載されている。

地域貢献・地域連携活動の一環として、今年度も「mitまちなか大学」を開催し、市民に向けた大学の「知」の発信に努めてきた。今年度は、特に、地域研究に取り組んできた学内の団体による連続文化講座を開催し、学内組織・団体との連携・協力関係をより強固なものとすることができた。また、松山地方局の協力を得て、不動産登記や相続問題などに関する市民向け講座を「mitまちなか大学」として共催にて開催するなど、地域の諸団体との連携もさらに深めることができた。その他、愛媛大学と連携協定を締結している各自治体からの依頼に基づき、種々の講座や講演会への講師派遣もおこなった。愛媛県と大学との連携協定に基づき、今年度も法文学部の協力を得て、県民向けの「消費者講座」と法文学部生向けの「法学特講（消費者問題講義）」を合わせて開講し、

多くの市民および学生の受講を得た。さらに、愛媛県の依頼に基づき、新居浜市および西予市において開催された「消費生活講座」へも講師を派遣し、地域自治体との連携強化にも努めた。

また、同様に、愛媛県からの依頼に基づき、過疎地域集落支援への取組みについてもコーディネータを派遣するなど協力体制を深めた。宇和島市との連携協定に基づき、過疎集落の1つである津島町御槇地区の集落調査を委託され、継続的に調査をおこなった。5月の事前調査と6月の地域説明会に始まり、8月には法文学部学生の協力を得て地域資源調査をおこない、10月以降には4度に渡り、御槇地区の11集落（自治会）の現況調査および聞き取り調査をおこなった。これらの調査結果の報告会を2010年2月20日に同地区公民館にて開催した。この調査研究は次年度以降も継続する予定であり、今年度の実態調査に基づき、今後の御槇地区のあり方が検討されることになる。

今年度は、地域との連携活動を深める目的で、主に県内各自治体等に呼びかけて、「地方分権問題学習会」を5回にわたり開催した。道州制および地方分権改革に関する議論が中央で進む中で、地方においてもこれらの問題を議論する場を持つ必要があるということであった。毎回、多くの方々に参加し、議論も盛り上がった。

昨年度に商標登録を得た「ぎょショック」カードについても、食育問題が注目を集める中、相変わらず各地の自治体・教育機関からの問い合わせが続き、注目されている。

地域シンポジウムは、今年度は2つ開催した。2009年10月3日には、今治市において愛媛大学図書館と共催して「講談『猿蓑佐助』と今治藩家老江島家文書展」を開催し、多くの市民が集まり、新聞報道にも取り上げられた。11月26日には、法

文学部および教育学部と共催して「『坂の上の雲』のまちづくりシンポジウム」を開催し、松山市長と5名の学生によるパネルディスカッションをおこない、学生と市長との意見交換に盛り上がった。

愛大ミュージアム開館に合わせて、今年度も「愛大博2009」が開催され、当センターもパネルを作成し展示したほか、「プロムナード・コンサート」の映像を流すなど、センターの活動の紹介をおこなった。

次年度には、社会連携推進機構長の意向もあり、当センターのあり方が見直し・検討されることとなる。これまで6年間にわたり、継続して地域研究活動や地域貢献・地域連携活動に取り組んできた成果が失われることがないように、この動きを見守りたい。
(宮崎 幹朗)

2 重点研究活動

2-1 観光による地域振興と地域づくりの展開

本グループでは、観光を中心とした地域づくりの現状と課題を把握し、各地の成功例等を検証しながら、愛媛県および四国における観光による地域振興のあり方を検討することを目指して、調査・研究を進めてきた。

2009年度には、観光による地域振興に取り組む先進地調査として、愛媛県内子町のまちづくり(6月)、滋賀県長浜の黒壁のまちづくり(7月)、京都の町家保全(9月)、岡山県倉敷市の美観地区(9月)の現地調査をおこなった。また、農山村地域のグリーン・ツーリズムへの取組みに関する調査として、今治市伯方町(6月)、内子町(11月)、松野町(12月)へ出かけ、農山村地域と都市住民との交流に関する問題について調べた。さらに、道後地区に来訪した観光客に対する意向調査をおこない(9月)、道後における観光振興の可能性について検討した。これらの調査については、調査実施後、研究会を開催するなどして、調査結果を整理し、研究活動を進めた。その他、食を中心とした地域づくりや観光客誘致への

取組みの問題を考えるための研究会を開催するなどして、研究活動を継続的に進めてきた。

各メンバーの個別研究も継続的におこなわれ、共同研究の成果と合わせて、各種研究会での報告や講演に示されるとともに、本年報をはじめ種々の雑誌等へ投稿されている。11月には、法文学部および教育学部と共催で「『坂の上の雲』のまちづくり」シンポジウムを開催し、松山市における観光への取組みをテーマとしたディスカッションがおこなわれた。学生の学習・調査と合わせて、各メンバーの研究の一端が示された。

(宮崎 幹朗)

2-2 グローバル化と地方分権化時代の地域文化

21世紀社会の特徴はグローバリゼーションとローカリゼーションとが同時進行していることである。このことが地域文化にもたらす影響を多角的に把握し、新たな地域文化の創造の拠点を見いだすという課題に、理論と実践の両面からアプローチする研究の第2年目。

2-2-1 多文化共存と地域

第1研究グループ(地域創成原論チーム)は、地域文化創成の原理論の構築を目標にして学際的研究を継続した。2009年度は、昨年度に引き続き、地域において異質であることの権利と共存の条件を、政治、文芸、福祉、経済などの視点から複眼的に考察するという課題のもとに研究を進めた。4月に法・行政の視点を担当していたメンバーの1人が他大学へ転出したため、当該分野が欠けたのが残念であった。他方、アメリカ文学を専攻する大学院研究生1人が新たに参加した。研究成果は本年報に掲載されている。

2009年度の研究例会の開催は次の通りである。

2009年10月29日(木曜日)

林康次氏「ポウとメルヴィルの〈アメリカス〉のロマンスー「北」と「南」の衝突ー

2009年11月12日(木曜日)

中西典子氏「英国のコミュニティ・ケア改革と

パートナーシップ政策－イースト・ロンドンのタワー・ハムレッツ区を事例に－

2009年12月17日(木曜日)

モヴェ・エリック氏「地方の発展と観光事業－フランスでの事例における考察と研究－」

2010年1月28日(木曜日)

松野尾裕氏「希望の経済学・試論」

2010年3月5日(金曜日)

立川信子氏「フランスと日本の家族類型についての疑問」(松野尾 裕)

2-2-2 地域の芸能・絵画等における大学 Produceの可能性

大学の地域貢献が唱えられて久しい。その声は特に大きくなったのは独立行政法人化を挟んだ時期であった。今や死語に近い「独法化」とともに、地域貢献は地方大学の生き残りというか生存理由としての金科玉条になるかに見えた。

その地域貢献は、地方によって、大学によって捉えられ方と求められ方が違う。同一大学内に於いても温度差があるであろう。就中、所謂「文系」という枠組みの中でそれが語られるときには、当然ながら問題が先鋭化して露見する。

「何をすることが地域貢献なのか」の問いに対しての解答は様々であって、その一つ一つの解答がそのままに地域貢献であって、それを紡ぎ上げた所に地域貢献なるものがあると総括することは容易い。しかし、その雑然とした総体が本当のあるべき「地域貢献」なのであろうかとする問い返しはあってよいのである。

その風潮の中に、地方大学である愛媛大学は地域創成研究センターを立ち上げ、文系の地域貢献に関わる各研究を総括する方策を用意した。それに連動して多くのプロジェクトや共同研究がなされてきた。本重点研究もその一つである。

従来型の地域貢献に関する研究に、地域の文化や歴史に関して大学がその資料を収集、研究し、一般に公開するというスタイルがある。これは、比較的容易い作業であるうえに、シンポジウムの動員数、アンケートなどある程度の評価を得やす

い。ところが、この方式にはその担当する大学教員の専門性が限られてしまうという欠点がある。日本文学、日本史学が中心となり、他領域の大学教員は参加できないという状況を生み出してしま

う。その問題打開として、本重点研究では、大学が文化や芸能を発信する場をプロデュースするということを試みた。例えば、愛媛、さらには日本とも関係ない西洋劇や絵画を大学が展示会や公演をプロデュースして、地域に公開するというのは「地域貢献」にならないだろうか、というような原初的な問から生まれたプロジェクトである。

(福田 安典)

2-2-3 地域文化のアクチュアリティ～音と映像

重点研究グループ2-3「地域文化のアクチュアリティ」(壽卓三、高安啓介、千代田憲子、岸啓子)の2009年度の活動は以下の通り。

1. 作品制作等

①千代田・岸の共同制作作品『愛媛の景』(映像とサウンド08年)の上映発表会の開催(愛媛大学教育学部 2009年7月)

②自作品の写真(千代田)と音楽(岸)のコラボレーション、及びサウンド付映像制作を昨年度に引き続き行い、短編を試作した。併せて独自の素材開発研究を実施した。

③愛大博(11月):2-3のこれまでの活動とプロムナードコンサート映像をまとめたサウンド付プレゼンテーション(一部ビデオを含む)を制作し、地域創成研究センターコーナーにおいて、自動プレゼンテーションのループにより公開した。(岸)

④愛大ミュージズ設置にあたり、展示紹介背景サウンド制作:8区画の展示紹介映像(テレビによる紹介ビデオ)の背景サウンドを制作した。(岸、井上洋一教育学部講師)

⑤スクリーンセイバー制作:自作品を撮影した写真作品によるスクリーンセイバー《imagination》を制作し、HPで配布を予定している。(千代田)

2. 地域文化活動および研究

①美術・工芸（千代田）：四国の伝統工芸である水引を素材として、作品制作を継続している。

②四国の音楽活動調査（岸）

四国の音楽活動の調査は3年目である。4県のクラシック系音楽演奏会の開催状況と内容について実施した。調査対象を地元の音楽家・演奏団体主体に限定し、四国圏外からの巡回・引越し公演は除外した。資料収集は、雑誌・文書・パンフレット・ホールや会館発行の催し物案内・月例コンサート情報などの印刷物とインターネット検索により、新聞のインターネット版も使用した。注目は以下のとおり。

(1)四国内の唯一のプロオーケストラである瀬戸フィルハーモニー交響楽団（拠点香川、NPO法人から2009年に事業団体となる。）の活動様態：定期演奏会をはじめ恒例のまがめ第9演奏会、香川二期会のオペラ公演の伴奏、小豆島デリバリーコンサートなどの出張演奏、ホール付の活動、街かど演奏会、市民への演奏出張サービスなど、きめ細かくクラシックのニーズを掘り起こし、要求にこたえていることが明らかになった。

(2)『カルミナ・ブラーナ』舞踏付の完全版での上演（アルファあなぶきホール5周年記念公募事業）、モーツァルト版『メサイア』公演（香川）等明確なコンセプトを持つ演奏会が光った。調査結果の一部は、文化庁支援事業『日本演奏年鑑2010』（日本演奏家連盟出版）に項目「四国」として掲載される予定である。

3. 重点研究2-3 ホームページ制作

コンセプト研究（12月）の後、呼称を「愛媛大学アートフォーラム」とすることを決定した。サイトの目的は、大学でのアートを紹介したり、アートにまつわる知や情報を発信することである。今年度は2008、2009に制作したサウンド付映像や、スクリーンセイバーを掲載する。（岸 啓子）